

2022年11月20日（日）／説教者：國分美生

説教：「福音の種をまこう」－世界バプテスト女性祈祷日を覚えて－

聖書：マルコ福音書4：1～9

イエスはガリラヤ湖で群衆に「種まき」の譬えを話されました。注目したいのは、これは「種をまく人」のたとえ話であるという点です。ガリラヤには漁師も多くありましたが、それ以上に農民が多くを占めていました。種をまくことはガリラヤ農民にとって、老若男女、農家で生活する人なら誰でも経験すること。だからこそ人々は「種まき」と聞いたときどのような状況であるのかすぐ想像を膨らますことが出来たはずでした。

「種をまく人が種まきに行った。一つは、道端におちて鳥に食べられてしまった。他の一つは土がなくてすぐ枯れてしまった。他の一つはいばらの中に落ちて育たなかった。ほかのいくつものものは良い地の中に落ちて100倍もの実を結び続けた」

蒔いている時にうっかり道端やいばらの中に落ちて育たない種もある。でもおおかたのものは畑で実を結ぶ。しかも実を結ぶのには人間の努力だけでは難しいということを経験した農民たちは身をもって知っていました。生活の中で実感する神の恵み。一生懸命生きている時、神はきっと命を支える道を開いてくださる。その神を信頼して生きよう。その希望をイエスはたとえ話で伝えたかったのではないのでしょうか。そしてその希望を聞いているみんなが分かち合うことをイエスは願っていたのではないのでしょうか。

イエスが生まれる少し前から、ガリラヤの農民たちによるローマ帝国への抵抗運動が続けられていました。人生には苦しいこと辛いことがたくさんあり、人間の無力さを痛感させられることも数限りなくあります。そのような日常生活の中であきらめないで、絶望しないで、最終的には命の神を信頼して生きること。そして同じように救いを求める人々と連帯して生きていくこと。ガリラヤの人々に響いた福音は、今私たちの胸に響きます。

世界バプテスト連盟女性部は今年も世界祈祷日プログラムを開催しています。バプテストであること、そしてこの社会において女性として生きること、を連帯のきずなとしている働きです。今年もアジア、北アメリカ、太平洋、アフリカ、ラテンアメリカ、カリブ海、ヨーロッパの各地から参加しています。性暴力の問題、予期せぬ妊娠、女性であるということでの差別。世界のバプテストの女性たちが、互いに創造力を働かせて、また自分の体験から共感しつつ祈りを合わせていきます。

心を合わせ神に祈ること、そして祈りに基づいた行動は、福音の種をまくことです。（國分美生）